

二〇一八年に観た舞台から

この年はいままでと違って体力的に観たい舞台を全て観ることが不可能となった。だから回数も少ないし肝心な舞台を見逃したこともある。

去年までは観劇したすべての舞台の観劇記を書けたのだが、これからは観ることが出来る舞台も限られるのでタイトルを『新・観劇片々』と変更することにした。

今年の観劇数は七八本と少なく、その代わりに地元で開催された映画や展覧会やコンサートなどを観賞する機会が多かった。一八年に観た中から次の作品の観劇感想を紹介します。すべて『新・観劇片々』から抜粋しての転載です。

サクラダファミリア

イレブンナイン

一月二五日

コンカリーニョ

脚本・演出／納谷真大

松井哲朗（劇評誌「新・観劇片々」主宰）

頑固一徹で悪者視された男の本質

七八歳のイワオを当主とするサクラダ家は、現在七人目の妻・キヌエと、その子・マツコとの三人暮らしであり、マツコには全部母親の違う四人の兄と二人の姉がいた。

今年の大晦日に頑固一徹のイワオは、その六人の母親の違う息子たちと娘たちと、その家族たちを集めて二五年ぶりの年越しを祝うことにした。六人には六人それぞれの事情があつて中々おいそれとは簡単には集まれない。

それでも何とか都合をつけて徐々に集まってくる。イワオは近所の教会の五人のシスターたちの所へ行つて何とか今日の集まりの趣旨の挨拶を練習しようとする。

頑固でわがままで暴力的な父親ではあるが血は争えない。そんな父が何とかしたいと言うのだから六人は何とかして集まってくる。

このサクラダ家の年越しは、蕎麦ではなくて何とカ

レーライスなのだ。その夜、その秘密が判った。ダレて二五年前に行方が分からなくなった次男のナツオはキヌエと密かに連絡があつたのだが、実はナツオは蕎麦アレルギーがあつて、そのためにサクラダ家ではカレーライスを年越しをすることになっていて、集まつた皆はそのサクラダ家の年越しカレーライス・パーティを懐かしがつた。

そして最後にイワオは秘密を告白する。実はイワオは戦災孤児で幼時に被災して生殖能力を失つていたのだつた。つまりこの兄・姉たちはすべてイワオと血の繋がりは無い。啞然とする全員。しかしそれ以上をイワオは言わないし、子供たちもそれぞれ一家を構えている立派な大人だからそれ以上は追及しない。血は繋がっていない。でも、親子は親子だし兄妹は兄妹だ。

イワオはもちろん子供たちも一切言わないし聞かないけど、おそらくこの七人の子ども達は不幸な母子家庭だった母子をサクラダ家に入籍して養育したのだからと想像できる。年越し蕎麦をカレーライスにするイワオの優しい心情。

頑固でわがままで自分勝手に暴力的な父親像はひっくり返るが、そのことを謝罪するイワオを慰める形で一同はサクラダ家を解散して改めて年越しをする。でもイワオは我が人生を全うしたと信じる。今後は施設に入所し

て最後を送るつもりだ。

正月、一人で茶を飲むイワオの部屋に一人暮らしを始めたキヌエとマツコがそれぞれ偶然に年賀に来たところが終幕だつた。

その他、家族・友人など一人一人の出演者たちが全編に亘つて主題に関係する沢山の話題を次々と演じるのだが、その詳しい内容は、この舞台を観た観客だけの特権である。現代喜劇として秀逸な舞台であつたと思う。

さよなら山鶴、またきて翅鶴

ふかがわ市民劇団

二月四日(再演)

かてる2、7

脚本・演出／渡辺貞之

演劇の表現が、現実に生きている人たちの新鮮な存在を創る

「美術表現を使ったポスター、音楽を使ったCM、短詩を使った標語」とは僕が良くいう芸術表現を巧みに現実利用した例なのだが、今回のこの演劇表現もまさにその一種であつた。現実の人間関係を上手く使つて「人間創りをする」という目的というか、そのために演劇を利用するのだが、そこに厳然として「演劇として充分な存在価値がある舞台」が出来ているのだ。逆に言うと、演劇という表現を使って人間の新しい存在を構築するの

だ。

(この部分は、この舞台が創られた経緯が詳しく紹介されているが、ここではそれを割愛する)

さて、物語は「鶴の千羽織を巡って人間の欲望の浅ましさがテーマであり、不条理な人間模様、そして純粋な子どもの淡い恋心」(作者のコメント要約)の具体化である。単純だが根本的なテーマを、参加者全員に上手く配役して、舞台の隅々まで隙のない一時間三〇分が堪能出来た。

鶴の化身「つう」は、最後にはお爺が欲に惑わされたことに失望して、この老夫婦に別れを告げたが、そもそも、この老夫婦は「つう」の命を助け世話をした「つう」の恩人なのだ。

それから一〇年後、「つう」の娘「あや」は、かつて母「つう」がお世話になった、あの老夫婦のその後が心配になって訪ねて来るところからこの物語は始まる。既に七年前にお爺は亡くなって、お婆がただ一人で誠実に暮らしていた。

お婆の在所で行き所に迷った「あや」を不審に思った子供たちのリーダーである「ゆう太」は、お婆の信頼も得ている。そこから子供たちと「あや」と村の人たち、そしてお婆との交友が始まるのだ。

村の大人たちは必ずしも純真だとは限らない。どうし

ても物欲に惹かれがちの日々だ。そんな中で「あや」は、迎えに来た母「つう」と一緒にお婆を連れて「お金のいない、人を憎まない、理想の鶴の世界」へと仲良くなった子ども達と別れを告げて三人で飛び立って行く。

この話だけ聞くと、ずいぶんと現世否定のペシミズムな感じがするのだが、そもそも原話の「夕鶴」だって現実の人間社会から去って行く話なのだ。この舞台を観て、「そんな物欲に惑わされるような卑しい人間に自分はなりたくないな」って思った所で、このお話は成功する。そういう物語なのだと思う。

まほろば

北翔舞台芸術三年目

四月二〇日

ポルトホール

作／蓬萊竜太

演出／村松幹男

「まほろば」に狂的に憧れる悲劇

「まほろば」という日本語の古語は、「理想郷(ユートピア)」、「桃源郷」などと同じようだと思ったが、『広辞苑』によると「理想郷」はある目的を持って創り上げようとする場所であり、「桃源郷」はあり得ない空想上の場所である。それに対して「まほろば」は現実にある素晴らしい場所、住みよい場所なのである。

舞台は、長崎のある旧家の奥座敷の控えの間。手の込

んだリアルで豪華な和室。これを見るだけで舞台の魅力が感じられる。そしてリアルな演技。しかも大学生という同じくらいの年齢の女性六人がそれぞれの配役の年齢の実態を感じさせる造形の正確さ。

祖母タマエは恐らく七〇歳代、母ヒロコは五〇代後半くらい、長女ミドリはセリフにもある通り四〇歳で独身、次女キョウコはアラフオーで、その娘ユリアは父親不明で自分は二〇歳といっている。そしてマオは何と小学高学年だ。

母ヒロコが願う家系の継続が次々と消されて行くというヒロコの悲劇が展開する。ヒロコにとっては家系の連続こそが「まほろば」なのだ。そしてラストには直接に血の繋がらないマオに初潮を見るのだ。「まほろば」って、そこまでして必要なものなのだろうか？そして、それが「まほろば」なのだろうか？と問い掛ける。

こっちにくるとあの景色がみえるわ

Intro

五月一九日

シアターZOO

作・演出／イトウワカナ

抽象的に表現された日常と非日常

マンション「桜の園」の住民たちと、新たに入居を希望する人たち。それらの家族の様々な日常の細かな生活

を描き出すのだが、それをリアルではなく歌唱とダンスとで象徴的に表現する。

ある日、見慣れない穴が暴発し、全員、気が付いたら非日常の感覚になっていた。これは死なのか？でもその中でもまだ日常の生活は続く。生と死とが平行に日常化している人達……「こっち」とは「死」で「あの景色」とは「生前」だろうか？そして人々は「生」と「死」とを日常として生きているのだろうか？

力強いテンポの速い音楽的リズムに乗せて、身体と声とで表現する日常と、その中に潜む非日常との不思議な感覚。

林檎園日記

久保栄作品上演実行委員会

六月二三日

ポルトホール

作／久保栄

演出／森一生

リアルで壮大な表現が魅力の舞台

この戯曲はチェホフ『櫻の園』に似て、資産家没落の悲劇の過程を描いている。ずっと以前にどこかで観たような微かな記憶はあるのだけれど具体的にはほとんど覚えていない。

こういう多数の人物が入り組んで葛藤する物語は、その人物相関図をあらかじめ見ておいた方が分かり易い

かなと思つたのだが、フトこの観客は知らない家族に初めて会うのだから、むしろ全く予備知識なく観た方が、あれこれと想像するので逆に強い関心が持てるのではないだろうかと思ひ直した。その方がリアルに直情的に对面が出来るのではないか、そう思つて素で観ることにした。

ところがちよつと違つた。何故かというと出演者の半分以上は僕がよく知つている俳優さんたちなのだ。だからその俳優さん個々人の既成概念がその役に強く入り込んで素直に客観的に観ることが出来にくいのだ。やはり舞台というのは創られた世界だから客観的・理論的に観るものだろうか？と少し考へてしまつた。

話の大筋は観た通りで、この大家族の様々な要因で徐々に崩壊していく一種の近代資本主義社会に呑み込まれていく悲劇だ。

大邸宅の茶の間を中心に、奥の部屋に通じる襖戸、二階へ上る中央階段、上手奥の裏口から入つて来る大きな土間など当時の大資産家の豪壮な私邸の一部が再現されてリアルで圧巻だ。だからその悲劇との落差が見事に表現されている。

最近多い観念的で抽象的な存在が魅力な舞台とはまるで正反対だが、逆にそれが新鮮で強く印象に残る舞台だった。

フレップの花、咲く頃に 劇団札幌座

六月三〇日 シアターZOO

作／山田百次 演出／齋藤歩

国が異なる人たちの交流の優しさ穏やかさ

日本が第二次世界大戦を引き起こして敗戦に至つた一九四五年ころ、当時、日本が占領していた樺太（現在のサハリン）の、その頃の樺太に住んでいた人たちの物語だ。

当時はソ連から占領したこの地を樺太と命名して日本の領土としたが、ここには先祖代々生きてきたアイヌの人たち、当時のソ連から移住したロシア人、朝鮮から強制移住させられたその国の人たち、そして日本人という全く出自の違う四つの国の人たちが住んでいた。

一九四五年を境にそれぞれの出自国の事情により対立せざるをえない境遇に立たされたのだ。そして言語も習慣も違うそれらの四つの国の人たちが強制的に一つの家に住まざるをえないことになった。全部「強制的」なのだ。その六人の、四つの国が異なる人たちの何年かの生活の中で培つた人間的な交流の優しさ穏やかさの経緯。

人間って良いなと思う展開、もちろん途中でなかなか一筋縄ではいかないなところもあるけれども、そこを乗り越えて行く智恵と人情の暖かさに魅入られる。

そうじゃないのに 劇団青羽Ⅱ韓国

八月四日 シアターZOO

原作／イ・ミギョン 翻訳／木村典子

演出／キム・カンポ

象じゃないのに 劇団札幌座

八月二二日 シアターZOO

原作／イ・ミギョン「そうじゃないのに」(韓国)

脚色・演出・音楽／斎藤歩 翻訳／木村典子

調査・問答が非常にリアルで分かり易い

この韓国版は、医者・刑事・母親それぞれの調査・問答が非常にリアルで分かり易い。日本版のいわば周囲の状況から主観的にそれとなく判断しているような表現とは違っている。必ずしもどちらが良いとか悪いとかは言えないが、これが原作の表現法なのかと納得できた。

ラストシーンで飼育員の二人が上半身裸で象のダンスをする。上半身を前に屈めて片手で大きな耳を作り、もう一方の手が長い鼻になって仲の良いダンスをする。これは中々見応えがあった。飼育員たちの心情が良く感じられるラストシーンだ。そして逆光になり花びらが散り撒かれて終わる。

ちよつと気になったのは、飼育員が良く言えばドライな氣質、悪く言えばちよつと意地悪っぽい感じだったことで、札幌版の彼は無邪気な純情男の感じだったことで、札幌版の方がこの舞台に似合うような気がする。

勃発事件を巡る責任論

先日、原作の韓国の劇団が上演した作品を和訳して、斎藤歩さんが上演した舞台である。

話の内容は全く同じで、パレードから脱走した一頭目の象が暴走し、ちよつと選挙演説をしていた議員候補者を大きく負傷させたという事件を巡って、精神医は飼育員の倒錯性欲が出た症状で病気の一種だと言い、刑事はテロの一翼を担った容疑があるといい、母親は子どもの頃から飼育動物を何でも解放してしまう感覚の持ち主だという。同僚は、彼は象と意志が疎通する特殊な心情をもつ男だという。

韓国版は、全く論理的にきちんとその事情を展開したのに対して、斎藤版は、斎藤さんの個人的感覚とでもいうようなハチャメチャでしかもそれが途轍もなく滑稽で可笑しい。不自然ではないけども何が飛び出すか分からない魅力があるのだ。それが斎藤版の変な魅力なのだろう。

韓国原作版と斎藤版の両方を見比べて、その違いを楽

しむ幸運を喜んだのだ。観劇の至福だと思った。

十二人の怒れる男

劇団ELEVEN NINES

八月二日

かでの2、7

作／レジナルド・ローズ

訳／額田やえ子

演出／納谷真大

容疑者を巡る有罪か無罪なのかの激論

アメリカの裁判所で陪審員として集まった十二人の男たちの喧々囂々の二時間二〇分。

全員一致が原則なので、一人でも反対がいたら討論をし直さなければならぬ。最初は一人が無罪で残る一人は有罪だった。討論はそこから始まる。有罪と無罪は時間が経つにつれて転々と入れ替わって結論が出ない。それは全員に意見の根拠があるからだ。

その熱い議論が延々と続くのだが、決して退屈はしないどころか満員の客席もシンとしてこの行方を我がことのように見守ってゆく。ラストは観た人だけが知っている特権だ。

これは民主主義の原点だろうか？ 民主主義とは途方もない手間が掛かって呆然としたくなるような気がするが、それが人間関係の基本でもあろうか？

この作品も何度か観ているし何度観ても結論は判つて

いるのに、それでも深く訴えかける舞台の激論が魅力なのだった。

マグロニアの花たち

アルカス演劇さーくる (在・佐世保) × 吟ムツの会

九月二九日

ことにPATOS

原作／ロバート・ハーリング

翻訳／黒田絵美子

演出／宮原清美

アメリカ落語

六人の老若女性たちの何気ない日常の描写だ。当地で人気抜群のジョーンズ美容室の常客四人は様々な立場に居るのだが、この美容室に来ると、すべてその素顔を曝け出す。

それはこの美容室の主人のあつけらかなとした性格による所が大きい。そういう六人の女性たちの日常が描かれる。

問題は原作のアメリカをそのまま表現したことだ。かなり無理があり不自然だ。その中でただ一つ、ナガムツが自分の息子と孫たちの軋轢を紹介して説明する時に、台座と座布団を持ち出しその上に正座して、その息子と孫たちとの状況と経緯を落語調で演じた時だ。これはさすがに面白く、ナガムツの得意技で圧倒した。

この舞台の主軸は、そういう人間関係のどうにもならない、でもそれが現実だとし自分にもあることだと笑って許すのがメインテーマだから、これは正に七代目・立川談志の規定した「落語は人間の業の肯定」の定義が適応される。この舞台は基本的に「人間の業の肯定」である落語なのだからすべて日本調の落語方式で表現した方が訴求力も強く、より面白くよりの確で良かったと思われる。そういう発想の転換が舞台の質を上げるのではないのか？

TEA FOR TWO 二人でお茶を

世界エイズデー札幌実行委員会

二月一日 ことにPATOS

作／関根信一 演出／町田誠也

それぞれの相手の、同じ特殊性を良く理解した友人関係

二人の男の二五年間に亘る交友物語。最初、偶然に出会った時、西野は二五歳で東京の妻子持ちの教員だったが、毎年、札幌へ出張で講師の仕事に来る。宮内は札幌在住のフリーターの同性愛者で複数のゲイ相手もいる。二人ともいわゆるゲイだ。

西野が泥酔して宿泊するべきホテルの前で吐いて倒れ

ていたところに偶然に来合わせた宮内が助けてそのままホテルへ流れ込んで、そのまま西野が宮内を同床させて、その翌朝から第一話が始まる。その二人は毎年一回ずつ会い、その五年後・十年後・十五年後・二十年後、そして二五年後の交流が六シーンに分けて描かれる。

これは元々エイズに対する予知と偏見とを訴える一種の現実社会に対する警告を主眼とした啓蒙劇なのだが、実際の舞台はもちろんそのことには何気なくフト会話の中に出て来るが、それは物語の流れの中で必然的に触れられるだけで劇の進行とは関係ない。

毎年一回ずつ二人は札幌のあのホテルで一夜の愛情を確かめ合うのだが、舞台はそれを五年ごとの六日間だけで象徴的に表現する。二人だけの二五年間の経過は全く退屈することなく二人の変わらない愛情と変化する身体を見せて行く。

この展開も魅力的だが、演じる村上義典のリアリティの強い演技力に魅了された。後で聞いたら先輩にお借りした「イヴァナ・チャバツクの演技術」を読んで勉強したと言うことだった。これはスタニスラフスキの演技論を解説した技術書で、一言でいえば「一八〇〇年ころまでの演技は外見の形を造るのに対して、舞台上の人物の心を演じる俳優の方法論」とでも言おうか。だが、それを読んで実際に稽古して演技力が格段にリアリティを

もつ演技者になった村上義典クンを凄いと思う。

その後、この舞台は「札幌劇場祭 18」の参加作品
三二作中で大賞となり、加えて村上義典君はただ一人の
俳優賞を受賞した。僕は期待が的中して自分の事のように
嬉しかった。

ゴドーを待ちながら 北海道演劇財団・他

一二月三日 hitaru クリエイティブスタジオ

原作／サミエル・ベケット

翻訳／安堂信也・高橋康也 演出／斎藤歩

衝撃的なインパクト

この古典的名作は、これまでに二四年前の九四年四月
から九年前の〇九年一二月までに四回の観劇記録があっ
た。それらは四回とも、すべてこの戯曲を端的に表現し
ていない、何か意識的に作り込んだもどかしさが延々と
書かれている。

それが今日の五回目に観たこの『ゴドーを待ちながら』
を観て衝撃的なインパクトをうけたのは何故か？ 人間
と社会の構造がリアルに理解できるのは何故なのだろう
か？

いきなりエストラゴンの存在とヴラディミールの登場
が僕の心に切り込んできた。そして二人の何かを期待し

て待っているという心情、ポッツオとラッキイが対立関
係にある人々や社会組織の構造などをこの四人を観てい
るととてもリアルに了解できる。

それは恐らく単純なことだと思う。出演の四人の演技、
特にエストラゴンの内面的な心情の発露と、それに対す
るヴラディミールの心情を超えた肉体的な発散の演技の
対立が壮観だ。しかもリアルなのだ。だからポッツオと
ラッキイも生きて絡んでくる。

とにかく重厚でコミカルで訴求力が強いこの舞台は
十二分に期待した以上に、今年一番の魅力を魅せてくれ
た後々に残る名舞台だったと思った。